口腔衛生会誌　J Dent Hlth 68: 128–136, 2018

原　著

介護施設利用高齢者における簡易嚥下状態評価票（EAT-10）と口腔内環境，口腔機能，栄養状態との関連

秋山　理加[1)]　濱嵜　朋子[2)]　酒井　理恵[1,3)]　片岡　正太[1)]
角田　聡子[1)]　邵　仁浩[4)]　巴　美樹[2)]　粟野　秀慈[5)]
岩﨑　正則[1)]　安細　敏弘[1)]

概要：【目的】簡易嚥下状態評価票（EAT-10）と口腔内環境，口腔機能および栄養状態との関連性を，反復唾液嚥下テスト（RSST）との比較により明らかにすることを目的とした．

【対象および方法】介護施設利用高齢者 90 名（男性 21 名，女性 69 名，平均年齢 86.0±7.2 歳）を対象とした．歯面清掃度などの口腔内環境因子，開口度などの咀嚼機能の因子，自覚症状の因子および簡易栄養状態評価（MNA-SF）を用いて，EAT-10 および RSST による嚥下機能リスク群と良好群で比較検討を行い，パス解析を行った．

【結果】EAT-10 による嚥下機能リスク群では，歯面清掃度，開口度，飲み込みにくさおよびむせの自覚症状との間に有意な関連がみられ，一方，RSST による嚥下機能リスク群では，開口度，舌運動，噛める食品数，飲み込みにくさおよびむせの自覚症状，MNA-SF との間に有意な関連がみられた．これらの因子を用いたパス解析の結果，EAT-10 と RSST との間に弱い相関を認め，EAT-10 からは歯面清掃度，舌の汚れ，飲み込みにくさおよびむせの自覚症状へのパスが示され，RSST からは舌運動と噛める食品数，MNA-SF へのパスが示された．

【結論】EAT-10 は主に口腔内環境因子と自覚症状因子への影響が示されたのに対し，RSST は主に咀嚼機能の因子と栄養状態の因子への影響が示された．EAT-10 による嚥下スクリーニングは RSST を用いた場合と相関するものの，その性質は大きく異なっていることがわかった．

索引用語：簡易嚥下状態評価票（EAT-10），反復唾液嚥下テスト（RSST），嚥下障害，多職種連携

口腔衛生会誌 68：128–136, 2018

（受付：平成 30 年 1 月 11 日／受理：平成 30 年 2 月 19 日）

緒　言

近年高齢者における嚥下障害について多くの報告がなされている．わが国における調査では，特別養護老人ホーム入所中の要介護高齢者の 38.6% に嚥下障害が認められたと報告されており[1)]，また，介護老人保健施設の全国調査では，利用高齢者の 9 割以上に摂食嚥下障害（疑いも含む）が認められたとの報告もある[2)]．

高齢者の肺炎の多くは誤嚥性肺炎で，その発症の原因の一つとして口腔内の衛生状態が挙げられており，口腔内環境と嚥下障害との関連が明らかとなっている[3,4)]．嚥下障害とサルコペニアによる嚥下関連筋群の筋力低下や[5,6)]，舌圧や舌運動[7–9)] などの口腔機能との関連も多く報告されている．また，嚥下障害が栄養状態と関連していることも明らかとなっている[10–12)]．さらに，嚥下障害は，高齢者の楽しみの一つである食事摂取と関連が深いことから，高齢者の Quality of life（QOL）にとって重要な因子とされている[13)]．つまり，嚥下障害は，誤嚥性肺炎，窒息，低栄養，脱水など生命に関わる合併症，そして QOL 低下による精神的障害を引き起こす．そこで嚥下障害を予防するためには，早期発見，早期ケアを施す必要性があり，「オーラルフレイル」[14)] や「口腔機能低下症」[15)] の概念が提唱されており，嚥下機能評価が重要視されている．

しかしながら，介護保険施設の現状を調査した報告によると，摂食嚥下機能評価・ケアのシステムが確立され

[1)] 九州歯科大学地域健康開発歯学分野
[2)] 九州女子大学栄養学科
[3)] 東京医療保健大学医療栄養学科
[4)] 九州歯科大学口腔保健学科
[5)] 九州歯科大学クリニカルクラークシップ開発学分野